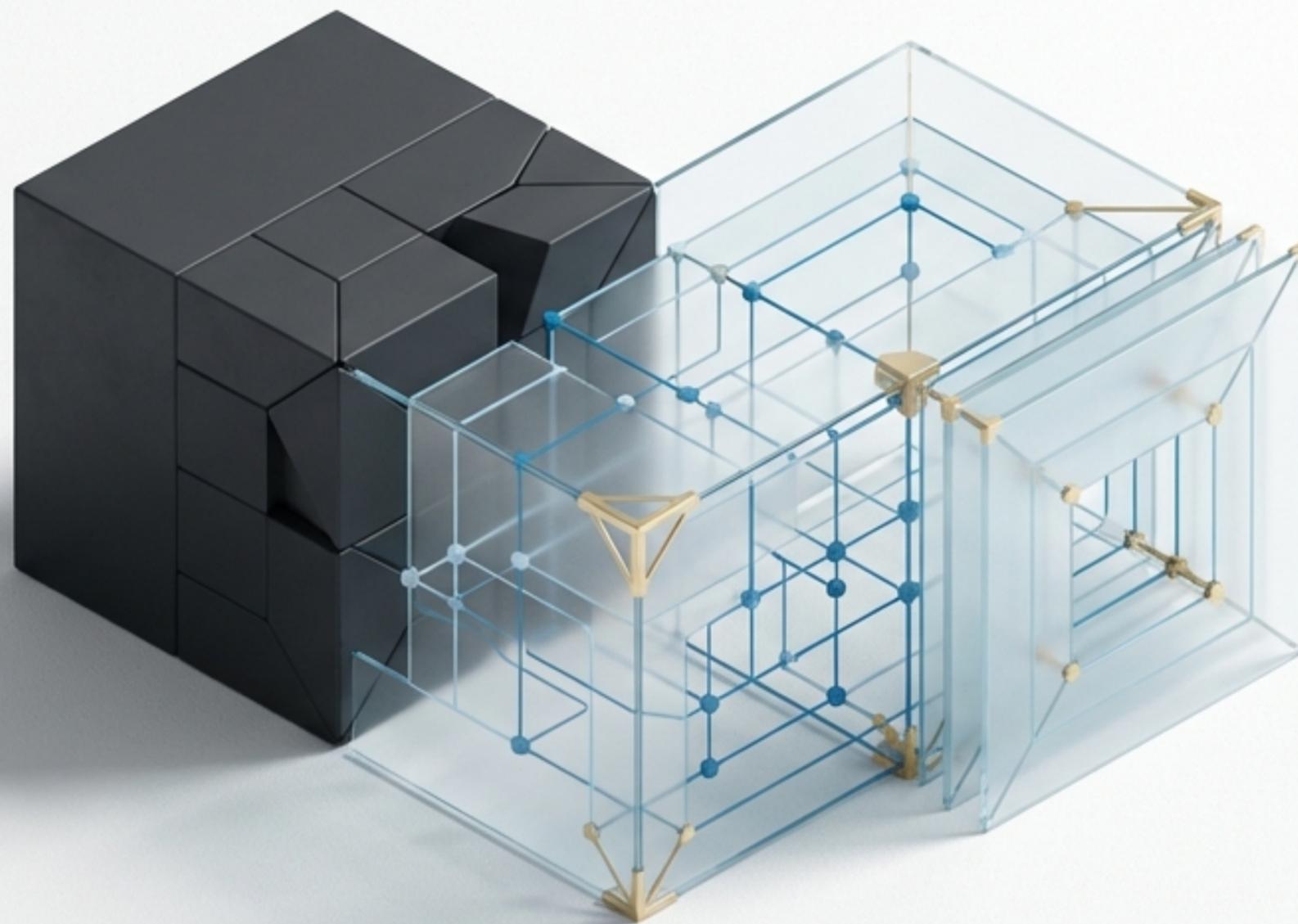
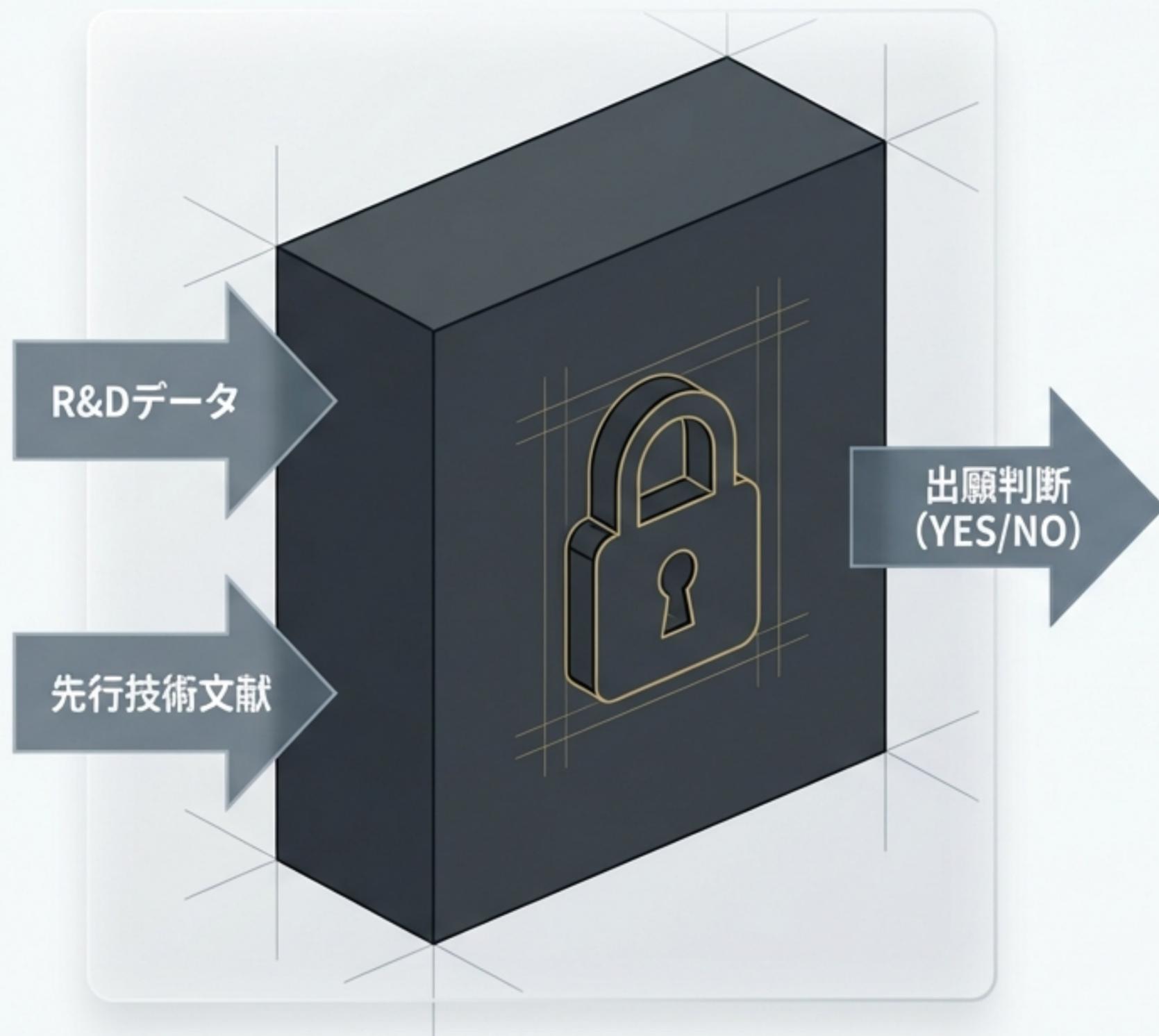


知財判断のブラックボックスからガラス張りへ 次世代知財人材育成とAIガバナンスの戦略的統合

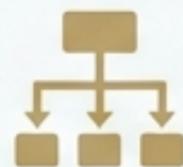


「経験依存」から抜け出せない知財組織の経営リスク



人材育成のボトルネック

R&Dからのローテーションや若手への業務委任が進む中、判断基準が個人の頭の中に留まり、育成が極めて困難。



スピードとスケーラビリティの限界

AX (AI Transformation) 時代における発明候補の急増に対し、特定個人の処理能力が組織の限界点となる。



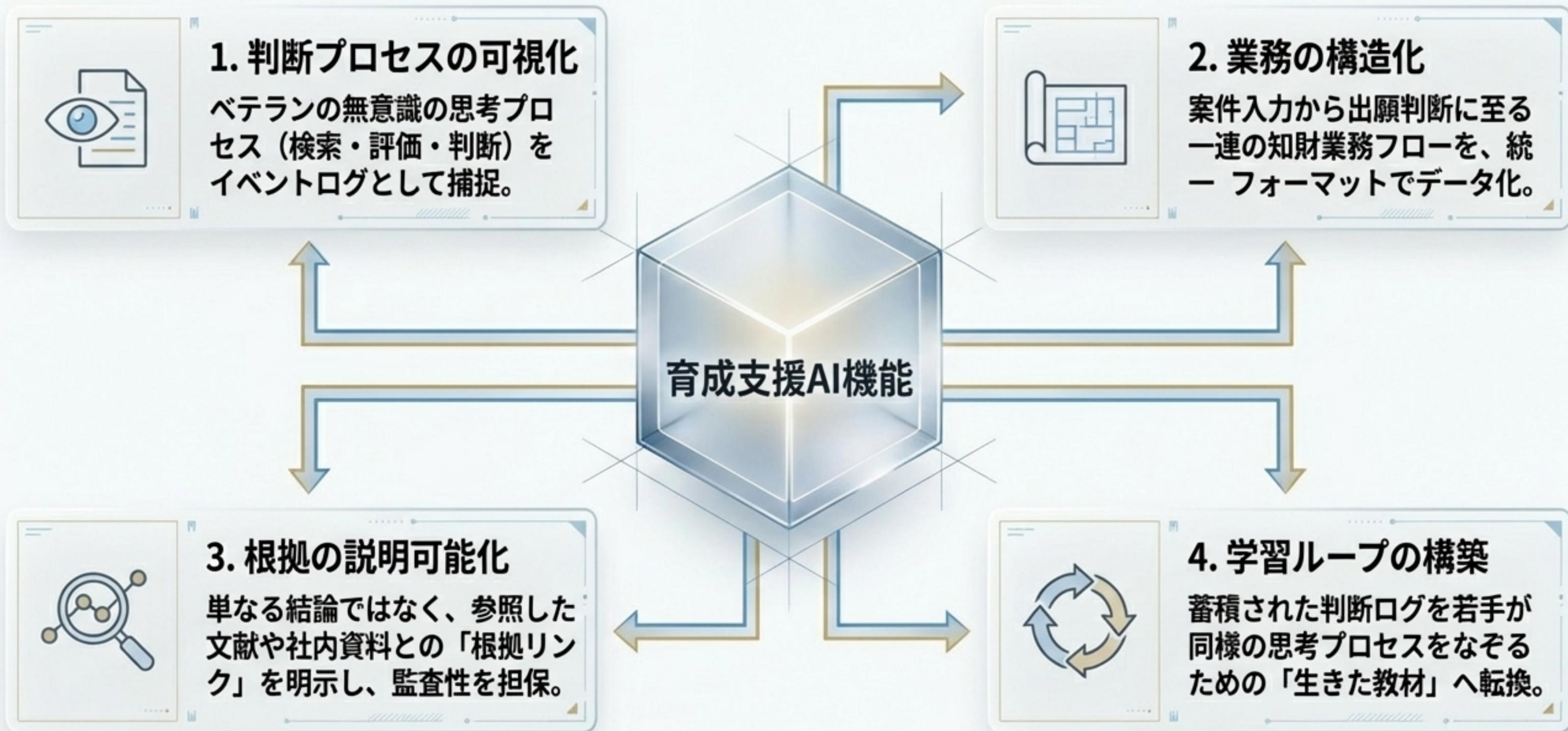
ブラックボックス化のリスク

成果物（出願判断）のみが共有され、「なぜその判断に至ったか（探索経路や評価観点）」が組織の資産として蓄積されない。

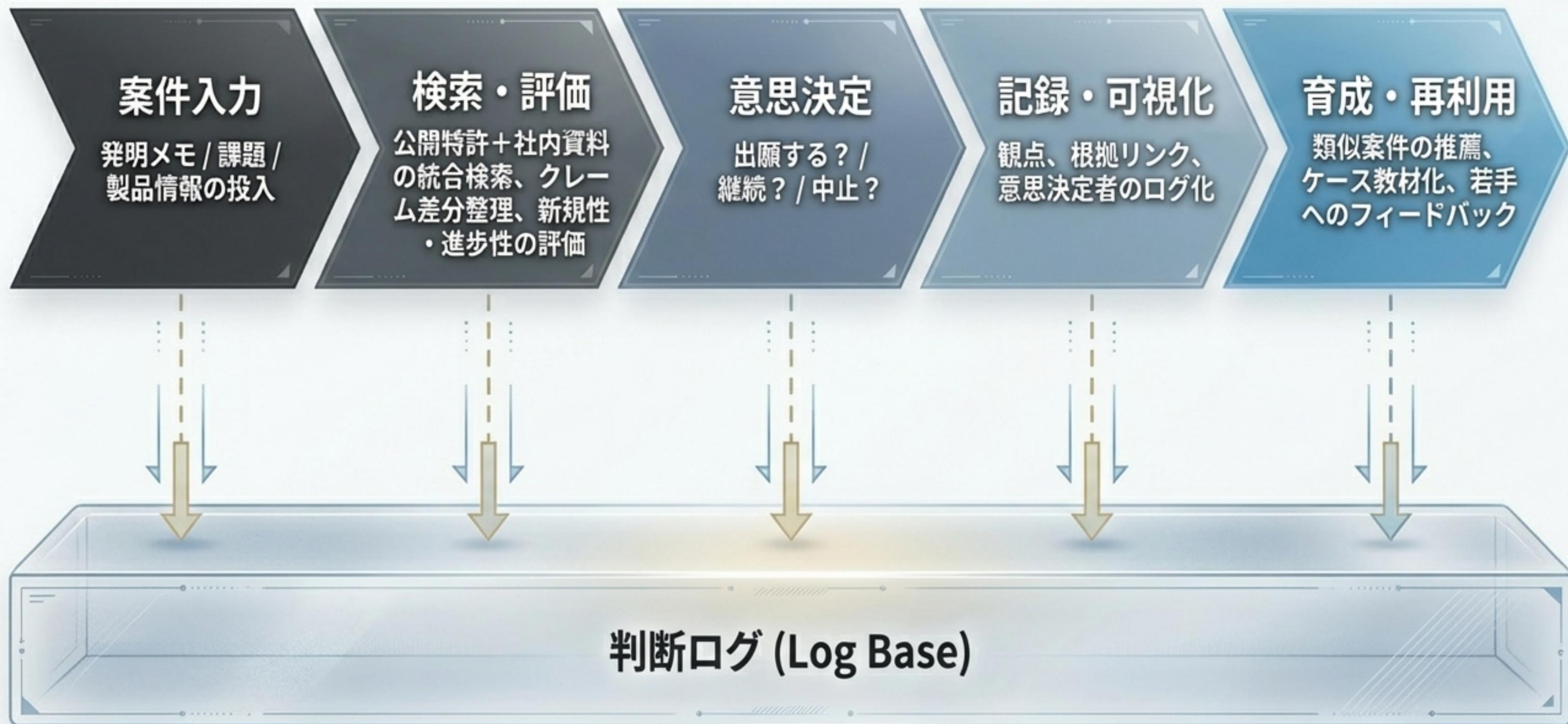
暗黙知から組織の学習資産へのパラダイムシフト

	従来型知財業務		育成支援AI導入後
知識の所在	ベテラン個人の記憶・経験に依存 (属人化)	➡	組織に蓄積される「判断のOS」 (共有資産)
評価の対象	最終的な成果物 (出願の有無)のみ	➡	成果物+そこに至るプロセス (問い・探索・理由)
若手の育成	長期間のOJTと 「背中を見て学ぶ」文化	➡	再現可能なケーススタディによる 迅速なオンボーディング
業務の性質	経験依存型 (Experience-Dependent)	➡	再現可能型 (Reproducible Workflow)

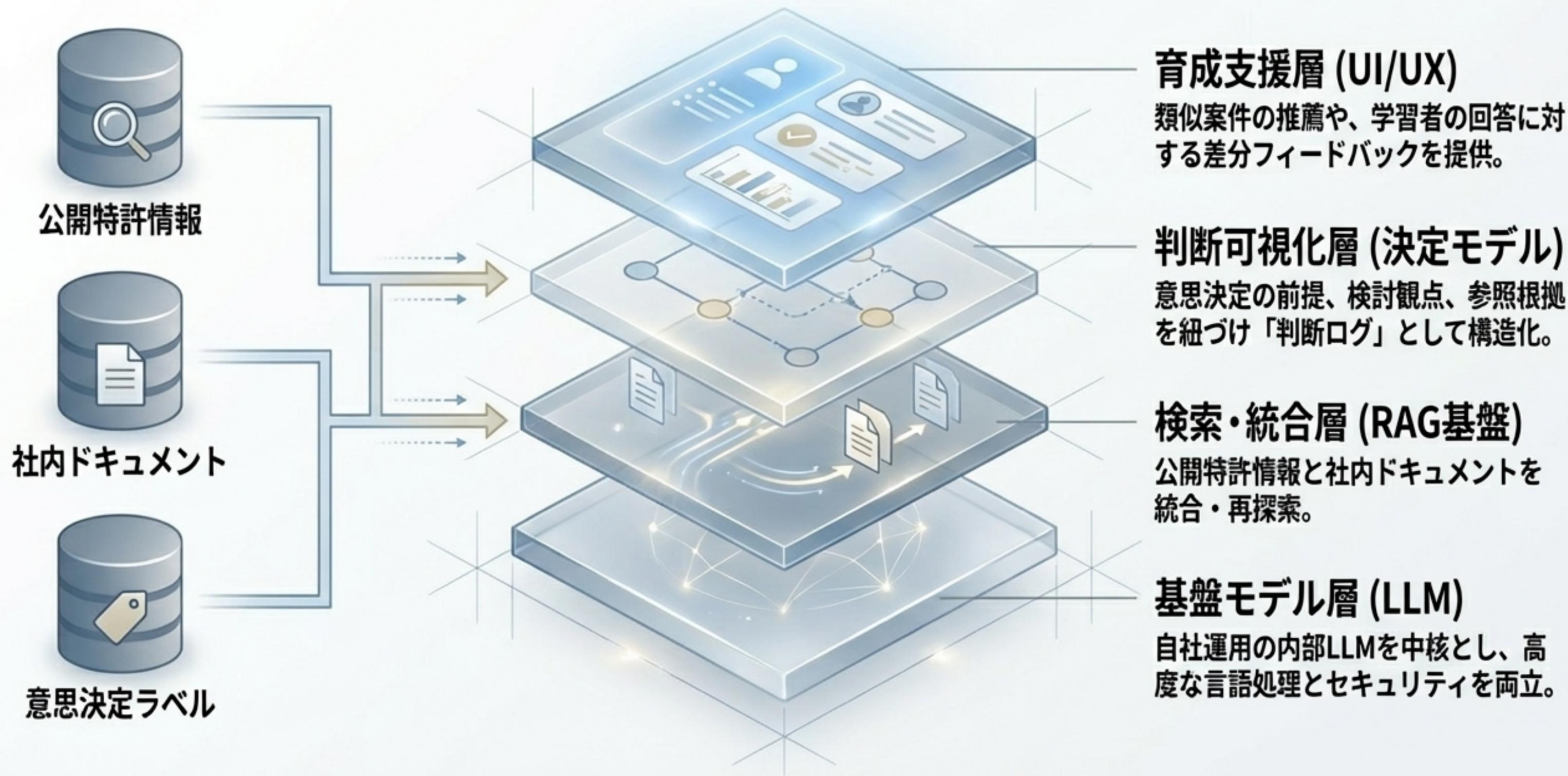
「なぜその判断に至ったか」をデータ化し、再現可能な資産へ



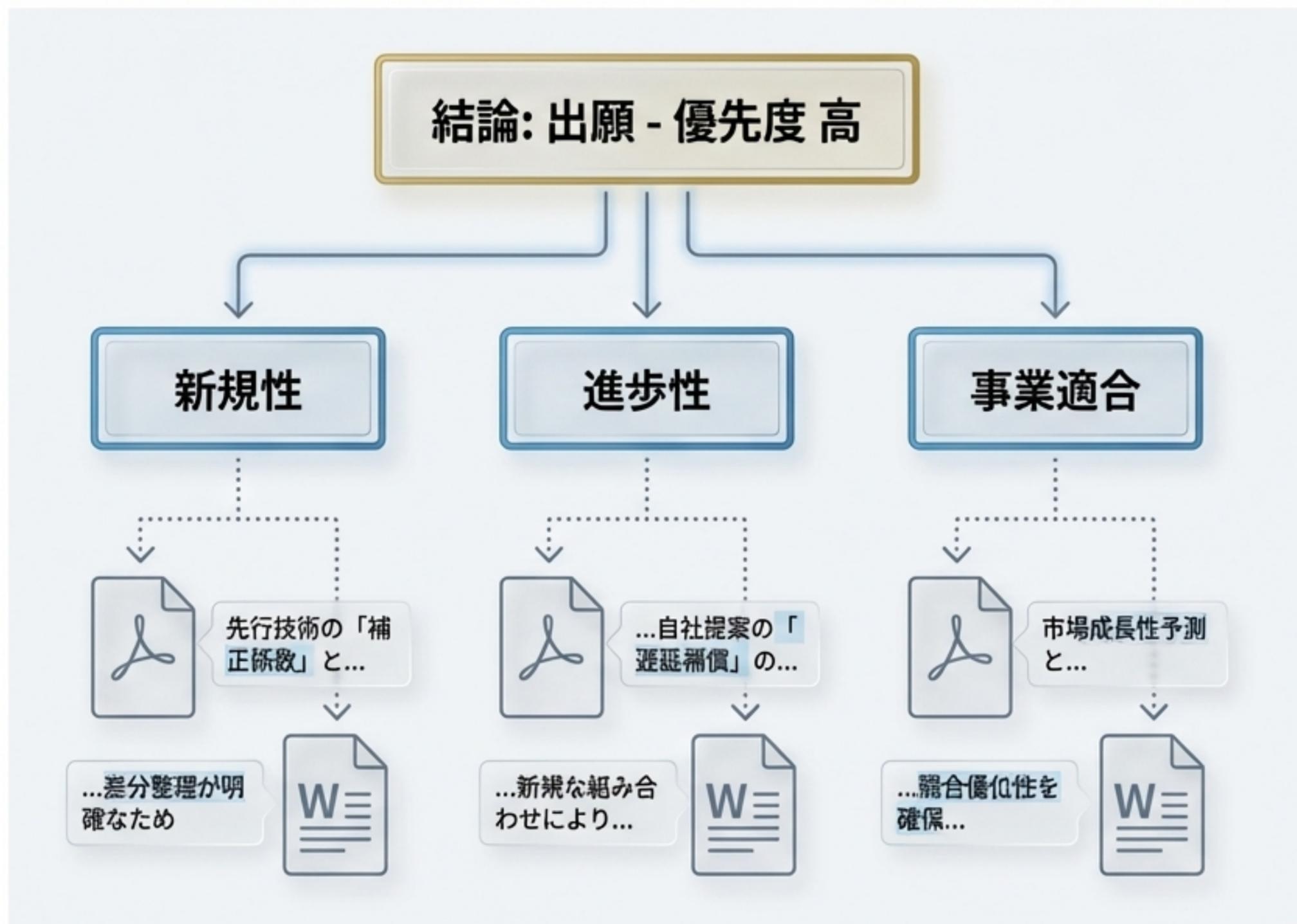
検索から出願判断に至る全プロセスを統合・追跡



「小規模LLM × RAG × 独自基盤」が支える多層アーキテクチャ



結論だけでなく「判断の根拠と論理構造」を可視化する



探索の軌跡

検索方針、検索式案、絞り込みの履歴を完全にトレース可能。

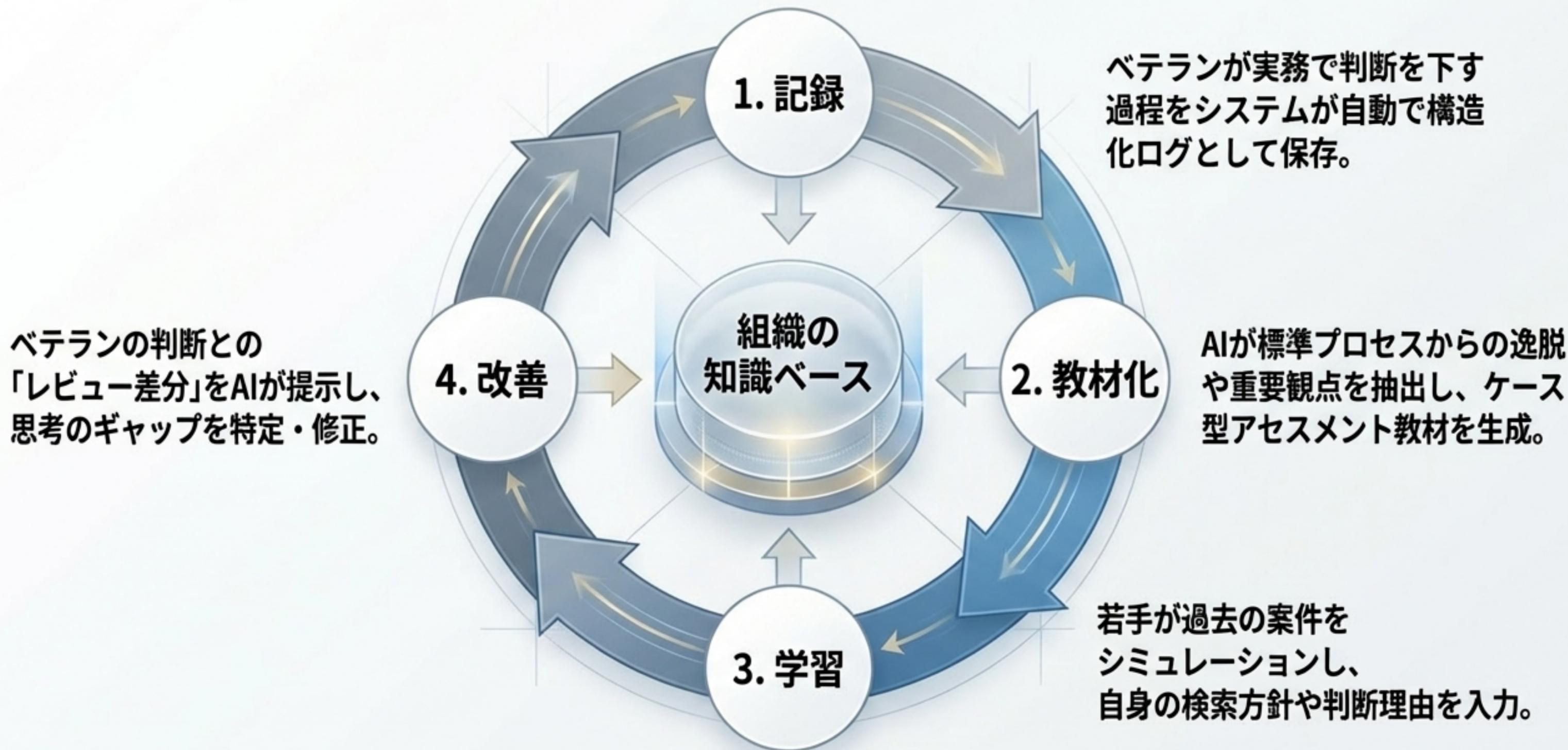
根拠の直接リンク (Faithfulness)

先行技術の「補正係数」と自社提案の「遅延補償」の差分など、実際の文献へ直接遷移。

評価観点の網羅

新規性・進歩性に加え、事業適合性などのビジネス基準も構造化して提示。

現場の判断を「生きた教材」に変える育成サイクル



「判断プロセスの教材化」という独自のホワイトスペース

	海外IPMS	海外特許分析	国内知財検索	本ソリューション
知財業務のワークフロー統合	●	●	●	●
AIによる高度な検索・要約	●	●	●	●
社内非構造化データの統合 (PDF/Word等)	◐	○	○	●
判断理由の可視化と 育成カリキュラム化	○	○	○	●

管理・検索の自動化に留まらず、「なぜその判断に至ったか」を若手が学べる設計を
プロダクトの中心に据える唯一のソリューション。

現場の判断を、継承可能な学習資産にする3つのユースケース



1. 新任担当の オンボーディング

過去の優れた判断ログをケース教材として学習。

シニアとの「レビュー差分量」を定量化し、成長曲線を可視化。



2. R&D部門との 共通言語化

発明候補の優先度付けとその理由（事業適合性、競合回避）を瞬時に可視化。

知財会議の質を向上させ、意思決定スピードを劇的に加速。



3. 弁理士との 協働高度化

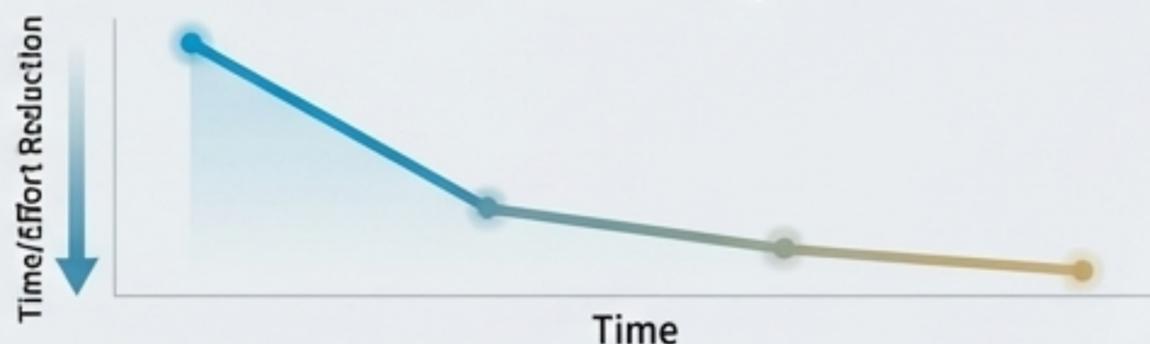
出願方針の根拠・論点（クレーム差分や構成要件分解）を事前に整理。

外部専門家とのコミュニケーションを高密度化し、手戻りを防止。

人的資本投資としての「育成支援AI」投資対効果 (ROI)

Executive Dashboard

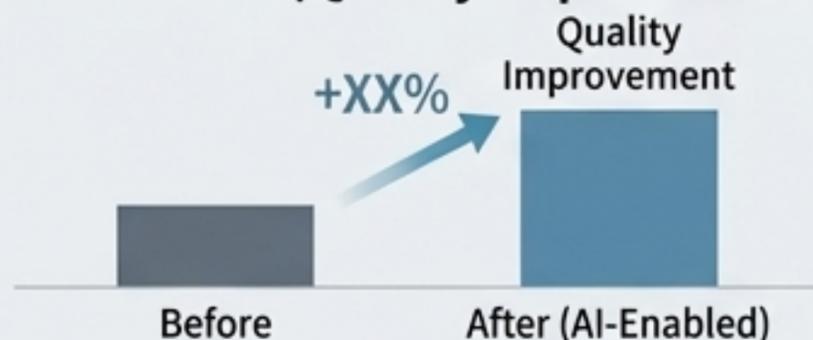
Short-Term Indicators (Efficiency)



短期指標(効率化)

-  - 判断リードタイムの短縮
-  - 検索およびレビュー工数の削減、再調査率の低下

Mid-Term Indicators (Quality Improvement)



中期指標(品質向上)

-  - 論点・観点の漏れ率の低下
-  - レビューにおける差分(修正量)の減少、後工程での手戻り防止

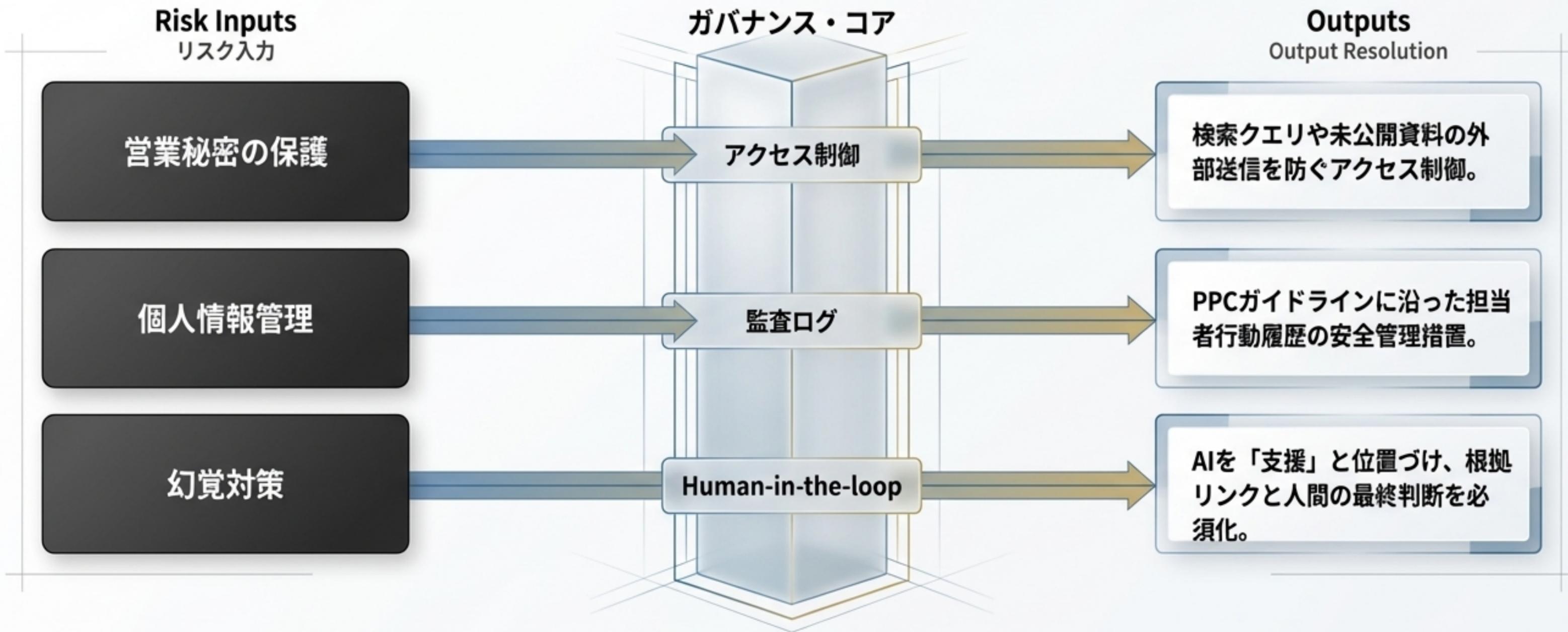
Long-Term Indicators (Reproducibility & Succession)



長期指標(再現性・継承)

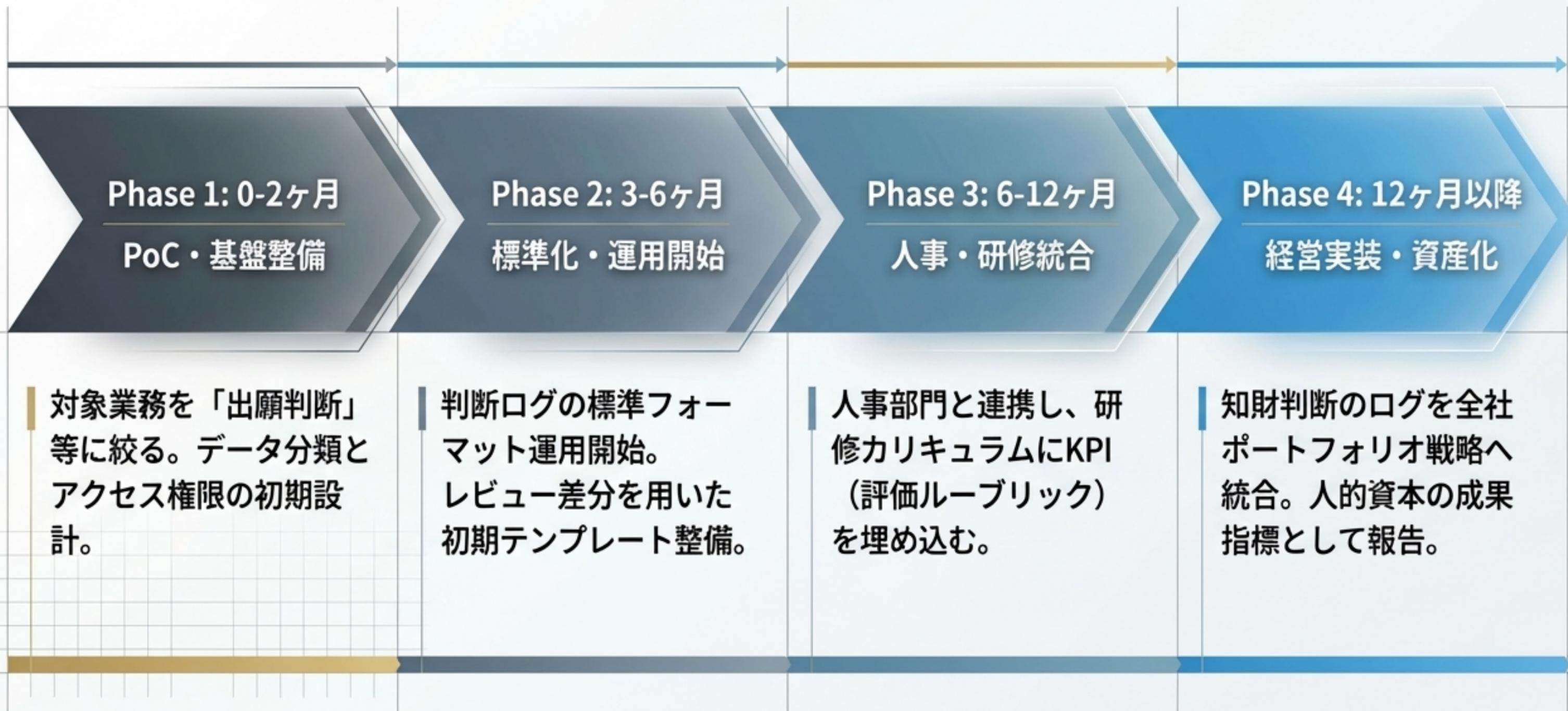
-  - 担当者交代後の判断品質の維持率
-  - 標準プロセスの遵守率と監査可能性の確立(人的資本KPI)

政府ガイドラインに準拠した強固なAIガバナンス体制

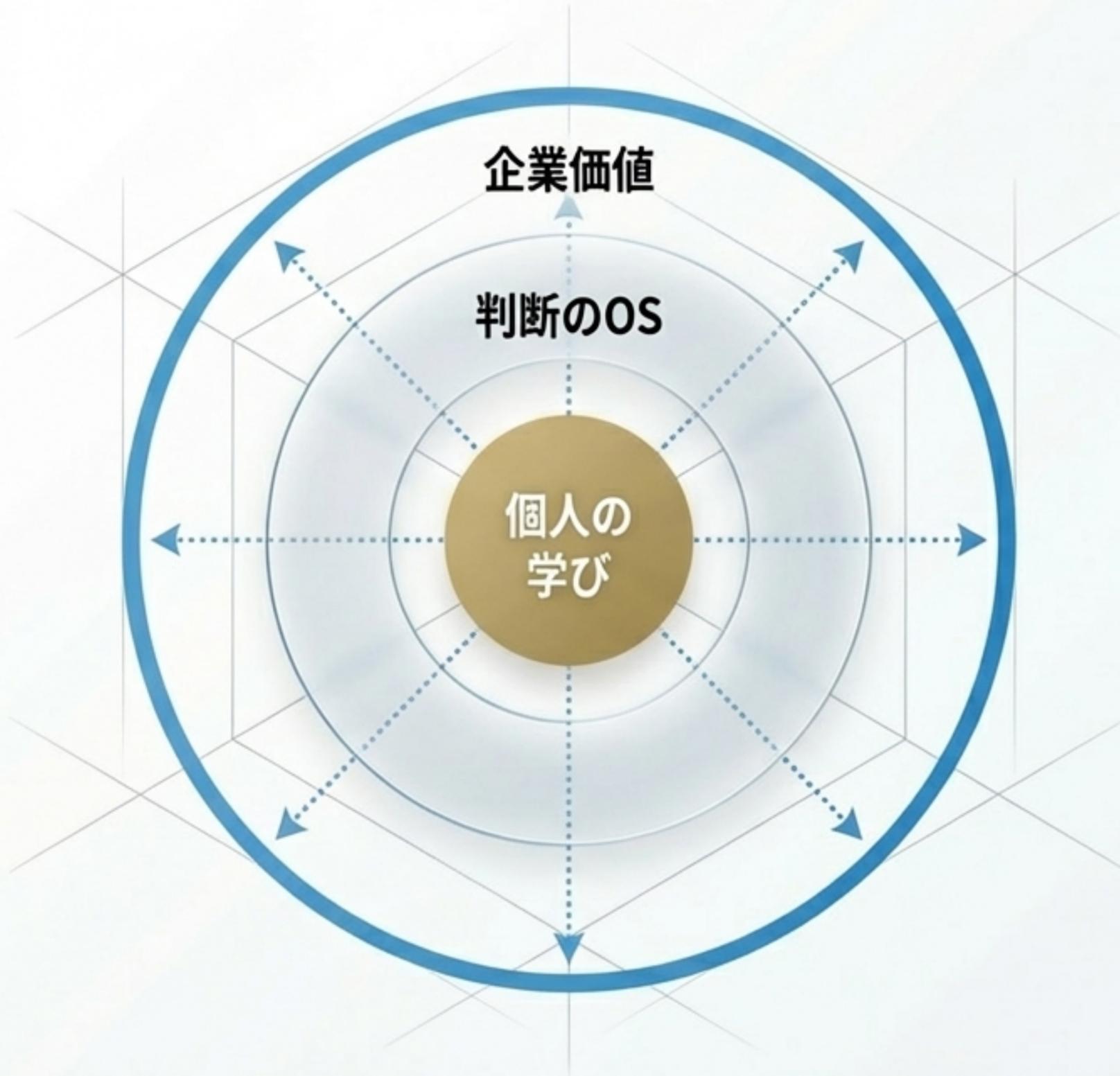


経済産業省（METI）のAI事業者ガイドラインが求めるリスクベースアプローチをシステムレベルで実装。

リスクベースで進める段階的な導入ロードマップ



個人の「学び」が、企業の「無形資産」へ直結する



- ミクロの行動**
一人の若手がAIを通じて過去の判断根拠を学び、正しい検索と評価を行う。
- マクロの価値**
その日々の蓄積が、属人性を排除した強固な「知財のオペレーティングシステム」を形成。
- 経営へのインパクト**
経産省のガイドラインが推奨する「無形資産・人的資本への投資」が具現化され、企業の次世代イノベーション競争力へと変換される。



知財判断の「OS」が、 次世代のイノベーション 競争力を決定する。

ブラックボックスからガラス張りへ。
経験依存の知財組織を、永続的な学習基盤へとアップデートする。

経営課題としての知財・人的資本投資に向けた
戦略ディスカッションのお願い